

## 「校友と大学」

明治大学理工学部 高木仁之

東日本大震災から早3年という月日が流れ、被害者の方々への追悼式が各地で行われ地震、津波の悲惨さを報道番組で拝見し改めて自然災害の凄まじさを感じた。亡くなられた皆様のご冥福を心よりお祈りするなかで、一つの「絆」という光も見えた。人と人とのつながり生命として結びつきの大切さも同時に感じられた。この3月下旬から4月の初旬にかけては大学にとって卒業と入学という一大行事が開催される時期である。最近テレビを何気なく見ていると千歳空港内での72時間の人間模様が放映されていた。ちょうど3月末日の模様である。それぞれの人たちが飛行場から旅立つ場面や到着する人間模様である。私が強く印象に残ったのは、これから学業を卒業し新たな社会に向かって東京に就職する人たちと、そこで応援し励まし見送りに来た友人や両親達である。人間は支えながら生きていくのを感じる。そのときのナレーションで「人生は別れの数だけ年をとる。」という言葉が私の胸を突いた。

小生も30数年卒業生を送りその通りの年をとった。小生の研究室は院生とゼミ生で十数人の規模であるが、院卒で3年間、学部卒で1年間という人生から見れば短い期間であるが共に研究しながらの生活時間はそれぞれの個性を見られる教員にとっては幸せな時間でもある。就職の相談にのり将来の希望を同時に味わえる至福の時である。ここで生まれた絆は永遠に続いてくれるだろうと独りよがりではあるが思う。

ここでうれしい話も書きたい。私の講義を10年程前に卒業した校友二人が例年6月頃平日に会社の休みを取って聴講してくれる。その講義は仕事に役立つこともないが、学生時代の懐かしさに触れることが心の癒やしになるということである。私の眠くなるような授業も卒業生に役立つのだろうか。

絆は糸と糸を半分ずつ持ち寄って結ばれるとこれもどこかで耳にしたことである。大学は校友との絆をしっかりと造って行くことこそ明治大学への帰属意識が深まり校友会として担う役割も重要になって行くのだろう。



我が研究室の卒業式集合写真 明治大学リパティタワー  
23階岸本記念ホールにて 2014年3月26日